

7. 皮膚動静脈奇形 cutaneous arteriovenous malformation

先天的な血管奇形と、胎生期の動静脈瘻が複数個あることが基盤である。出生時には毛細血管奇形の外観を呈するか、あるいはそれほど目立たない場合もあるが、ある時期から増大傾向を示し、表皮が熱感を伴って腫脹する。拍動や振戦も伴う。四肢で生じた場合には、患部の肥大や延長を認め、Klippel-Trenaunay-Weber 症候群 (20 章 p.401 参照) をきたすこともある。

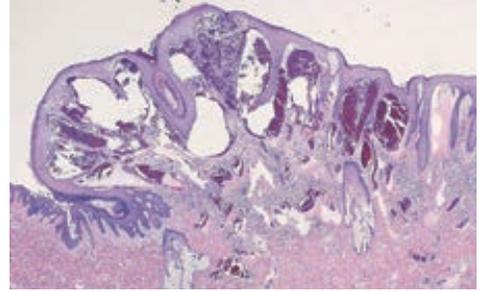


図 21.54 被角血管腫の病理組織像
表皮直下乳頭層の著明な毛細血管の拡張。

H. 線維組織系腫瘍 fibrous tumors

1. 軟性線維腫 soft fibroma

類義語：アクロコルドン (acrochordon), スキンタッグ (skin tag), 懸垂性線維腫 (fibroma pendulum)

症状

頸部や腋窩、鼠径などに好発する。半球状～有茎の、柔軟で常色～淡褐色調の腫瘍。表面に皺が多い (図 21.55)。頸部や腋窩などに糸状の小腫瘍 (長さ 2～3 mm) が多発するものをアクロコルドンないしスキンタッグ、体幹に単発するやや大きなもの (直径約 1 cm) を軟性線維腫、これがさらに巨大になり皮膚面から垂れ下がるようになったものを懸垂性線維腫と呼び、それぞれ区別している。肥満者、女性に好発し、一種の加齢変化と考えられている。

病理所見

膠原線維の増生が主体であり、細胞成分に乏しい。軟性線維腫や懸垂性線維腫では、腫瘍の中に脂肪細胞を有する場合も多い。

治療

必要があれば茎を切除ないし凍結療法。

2. 皮膚線維腫 dermatofibroma ★

同義語：線維性組織球腫 (fibrous histiocytoma)

Essence

- 線維芽細胞やマクロファージが真皮内で限局性に増殖した良性の硬い腫瘍。虫刺症^{ちゅうし}などの外傷に反応して発生する場合



図 21.55 軟性線維腫 (soft fibroma)



図 21.56 皮膚線維腫 (dermatofibroma)

がある。

- 成人の四肢に好発し、直径数 mm ～ 2 cm 程度の褐色調の隆起性結節を形成する。

症状・病因

“皮膚の浅い部分にボタンを入れた感じ”と表現される褐色調の皮内結節で、四肢に好発する (図 21.56)。緩徐に発育し、通常、ある大きさに達すると変化しない。横からつまむと病変部が軽度陥凹し、痛みが強くなることがある (dimple sign)。単発性であることが多いが、全身性エリテマトーデスなどの自己免疫疾患を背景として多発することもある。本症は微小な外傷に対して反応性に結合組織要素が増殖してできたと考えられ、厳密な意味では腫瘍ではないとする考え方もある。

病理所見

真皮から皮下にかけて、膠原線維や線維芽細胞、組織球が種々の割合で増殖 (図 21.57)。腫瘍細胞は血液凝固第XIIIa 因子陽性、CD34 陰性であり、隆起性皮膚線維肉腫 (22章 p.461 参照) との鑑別点となる。また、表皮では軽度の表皮肥厚とメラニンの増加を認める。組織球の増殖が主であるものを cellular type といい、やや赤みを帯び軟らかい。線維芽細胞や膠原線維の増殖が主であるものを fibrous type といい、膠原線維の間に線維芽細胞が散在する。

鑑別疾患

硬くて黒色調が強いもの、成長が比較的速いものは、悪性黒色腫との鑑別を要する。そのほか、隆起性皮膚線維肉腫、結節性黄色腫、母斑細胞母斑、青色母斑など。ダーモスコピー所見が鑑別に有用である (3章 p.63 参照)。

治療

外科的に切除する。悪性腫瘍ではないことが明らかであれば放置してもよい。

3. 肥厚性癬痕およびケロイド hypertrophic scar and keloid

★

Essence

- 結合組織の増殖による、境界明瞭な紅色あるいは褐色の扁平隆起。
- 外傷や手術などに続発して発生するが、突然発生する場合も